

瓦積基壇をもつ古代寺院 —播磨編—

寺岡 洋

基壇・瓦積基壇（かわらづみきだん）とは

寺院の伽藍は、金堂や講堂のような大規模な構造物、あるいは塔のような高殿建築を特徴としている。礎石の上に建つ瓦葺建物はそれまで日本列島で造られていた掘立柱建物とは比較にならないくらい重量建築物であった。1981年に再建された奈良・薬師寺西塔は、木材の重量が318トン、屋根が91トン、壁が71トン、相輪が3トン、建物の総重量は483トンにもなる〔小川2010〕。高さは33.9m、東塔より30cm高いのは地盤沈下を考慮したため、200年後には同じ高さになるそうである。

今年、屋根を葺直した奈良・正倉院では、34,623枚の瓦を使い、改修前より8トン軽量化されたが（土葺き→空葺き）、それでも屋根の重量は190トンにもなるそうである（「朝日」）。

重い建物を建てるには地盤の強化から始めなければならないこともある（掘込み地業）。そしてその上に建物の基壇を版築（はんちく）と呼ばれる工法で造り、基壇の化粧（装飾と風雨による基壇の崩壊防止）を行う。基壇化粧の素材には、石が最も多く（壇上積・切石積・乱石積など）、特異なものとして瓦積や塼（せん）積基壇がある。白鳳時代の瓦積や塼積基壇は、渡来系氏族が建立を主導した古代寺院の特徴のひとつに挙げられる。

日本列島最初の寺 — 法興寺（飛鳥寺）

日本列島で最初の本格的な寺院が建立された地は、よく知られるように当時の王都である飛鳥である。崇峻元年（588）、百濟・威徳王（昌王在位554～598）が僧と工匠集団を倭国に派遣し、飛鳥に法興寺（飛鳥寺）が建立された。したがって本格的な基壇の登場も飛鳥寺を嚆矢とする。威徳王代には扶餘の陵山里廃寺（陵寺）が建立されており、発掘調査がされている。

派遣メンバーの名前が「書紀」などに残る。寺工（てらたくみ）の太良未太（だらみだ）・文賈古子（もんけこし）、露盤博士（ろばんのはかせ）の將徳（しょうとく）白昧淳（はくまいじゅん）・瓦博士の麻奈文奴（ま

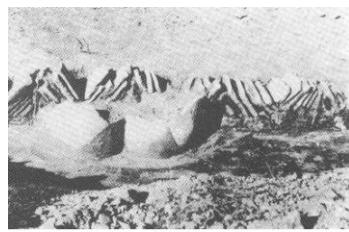
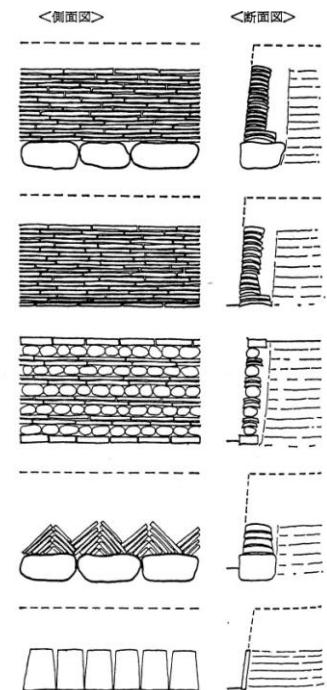


図8 軍守里廃寺址中央基壇（金堂址）合掌式瓦積基壇



図10 穴太廃寺再建金堂平積式瓦積基壇



↑瓦積基壇の分類

←檜隈寺跡瓦積基壇

なもんぬ）・陽貴文・陵貴文（陵の阤→↑）・昔麻帝彌（しゃくまたいみ）、畫工の白加。「寺の初め、茲（これ）より作（おこ）れり」である。

寺工（寺師）は寺院建築の技術者、露盤博士は塔の相輪（そうりん）の鋳造技術者で百濟第七の官位を持つ。寺工の2人はともかく、瓦博士（瓦師・造瓦師）が4人もいるのが目につく。土木の専門家の名前が見当たらないが？ 法興寺（飛鳥寺）の基壇は瓦積ではなく割石を積んでいる。

この飛鳥寺建立は百濟ミッションに「おんぶにだっこ」だったが、一番目立つ伽藍配置は百濟寺院の特徴である一塔一金堂（四天王寺様式）ではなく、一塔三金堂（塔の東・西・北に金堂を配置）という高句麗様式を採用している。扶餘・王興寺がモデルだという異説もあるが、後述ハンナレ論文では明確に否定されている（p 84）。軒丸瓦も扶餘出土のものと似るが、同範のものはないなど、施主（蘇我馬子）のバランス感覚が反映されているのかもしれない。

百濟の瓦積基壇・日本列島初期の瓦積基壇

瓦積基壇は百濟で成立・発展した基壇外装と考えられている。成立時期は熊津（公州）地域では見つかっていなことから、泗沘（扶餘）への遷都（538年）以降になる。

王宮跡と推定される官北里遺跡（扶蘇山城の南麓）、6世紀中頃に創建されたとされる軍守里廃寺

(前頁図 宮南池の西)・定林寺址(バスター・ミナルの東すぐ)、6世紀後半築造の陵山里廃寺(陵寺東羅城に接す)、7世紀初頭に建立された扶蘇山廃寺(扶餘)、7世紀前半の王興寺址(白馬江の対岸)などで瓦積基壇が見られる。ただ、金堂や塔など主要伽藍に使用される場合と、回廊、工房など付属建物に使われている場合がある。

瓦積基壇の瓦の積み方の分類については、田辺征夫氏の分類が大筋で日韓共通のようである〔前頁図 田辺1978・1997〕。網伸也氏は日本列島と百濟の瓦積基壇を広く涉猟されている〔網2005〕。韓国では趙源昌氏が多く書かれており〔趙源昌2006他〕、最近ではハンナレ氏が取上げられている〔ハンナレ2013〕。

日本において最も古く遡る瓦積基壇は穴太(あのう)廃寺(大津市)の創建金堂とされ、広く普及する契機となったのは百濟滅亡(660年)と大津宮遷都(667年)と考えられている。この時、多くの百濟人が近江に移住している。

7世紀後半ないし第3四半期(650~675年)に瓦積基壇を採用した寺院としては、

近江 穴太廃寺再建金堂(前頁図)、崇福寺跡、南滋賀廃寺(錦部寺?)

山背 北白川廃寺、桜原廃寺、大鳳寺跡

河内 新堂廃寺(7世紀後半 富田林市)

摂津 四天王寺(7世紀後半)、猪名寺廃寺(尼崎市)、伊丹廃寺金堂(伊丹市)

播磨 繁昌廃寺(7世紀後半 加西市)

などがある〔藤本2013〕。

これを見ると、近江・山背・摂津に各3ヶ寺と古い時期の瓦積基壇が見られることから、近江遷都以前にも百濟と倭国内の様々な集団・地域を結ぶネットワークが存在したことが推測される。

播磨の瓦積基壇

播磨では繁昌廃寺(賀毛郡)以外にも西条廃寺・野口廃寺・石守廃寺(賀古郡)と4ヶ寺で瓦積基壇が造られており、これらの寺院がすべて加古川流域に集中するのが注目される。また、繁昌廃寺では額部施文軒平瓦も見られ〔寺岡2013〕、北山背の桜原廃寺と山陰道ルートを介する交流関係が存在したようである。



繁昌廃寺講堂 瓦積基壇

■繁昌(はんじょう)廃寺(加西市繁昌町)

加古川の支流・普光寺川右岸に位置し、すぐ西側は丘陵で工業団地になっている。丘陵南端に乎疑原(おぎわら)神社が鎮座し、白鳳期の石造三尊像が安置されていた。丘陵斜面には、天神山・山ノ脇・山ノ辻・尼ヶ池の瓦窯が存在する。圃場整理に伴う発掘調査が行われ〔加西市教育委員会他1987〕、現状は水田。

寺域は東西85m(推定)×南北125m。金堂・西塔・講堂・北門・南門・築垣などの遺構が検出された。出土瓦の検討から東塔の存在が推測されており、薬師寺式の伽藍配置になる。

金堂基壇は、東西16m×南北13m、基壇化粧は不明であるが、凝灰岩割石の地覆石が残ることから「瓦積みの可能性が高い」〔菱田2010〕。西塔は基壇の痕跡のみ。一辺13~14m。

講堂基壇は東西24m×南北15m、「瓦積みの基壇化粧が施される」。繁昌廃寺は金堂・講堂が瓦積基壇であった。塔もあるいは?

出土瓦の検討により堂塔の造営順序が、金堂→西塔→(東塔)→講堂→北門→南門→築垣であることが判明し、7世紀後葉から開始された伽藍の築造は半世紀にわたったと考えられている。

■西条廃寺

印南野台地から加古川東岸に沿って南に延びる標高約40mの丘陵上に位置する。



西条廃寺 塔跡瓦積基壇発掘調査が行われ、史跡公園として瓦積基壇が復元されている〔西口・岡本1984〕。

周囲には初期馬具・金銅製帶金具・鉄鋌など多種多様な海外の遺物が出土した行者塚古墳(前方後円墳 全長約100m)を中心とする西条古墳群が展開し、寺域東に人塚古墳周濠が接する。

寺域は、東西約90m×南北約70m。伽藍配置は特異なもので、西に塔、東に西面する金堂(通常は南面する)、北に講堂が配される。類例は石川流域の渡来系寺院である野中寺(羽曳野市)でみられる〔上田睦1987〕。野中寺中門は二重基壇の可能性があり、下成基壇は瓦積であろう。西条廃寺の存続年代は、7世紀末~9世紀。

金堂基壇は、南北14.8m×東西12m(復元値)。基壇化粧は瓦積。瓦積下部には地覆石を並

べず、削り出した地山面に直接積上げている（図版分類図の2段目の図になる）。北辺が10.4m、南辺は3.94m残っており、北辺にはもう一列補強用とみられる瓦列が確認された。

塔跡基壇は一辺約11m。基壇の残存状態が最もよい東面基壇幅は10.9m。地山を削出し、その上に地覆石を置き（分類図の最上段）、**瓦積みする**。一般的にはこちらの工法が古い時代になるが、寺院は金堂を最初に建てるので、異なる集団・氏族が金堂と塔を建立したのかもしれない。

講堂基壇は削平されていたが、無遺物面（東西26.3m×南北15.6m）と遺物包含面が明瞭に分かれており、位置と規模から講堂と推定された。

基壇は完全に削平されていたが、雨落ち溝の基壇側に「**瓦を並べたような個所があり基壇最下位部の施設と考えている**」と特記されるので、瓦積基壇であった可能性はあるであろう。

■石守（いしもり）廃寺
加古川下流
東岸、日岡山の北東斜面の先端部に位置する。東は加



古川の支流・曇川

石守廃寺 金堂跡全景

（くもりかわ）が西流し展望が効くが、南・西は丘陵になる。北東1.5kmの丘陵上に西条廃寺、3km南には野口廃寺が立地する。奈良時代には加古川下流東岸に、西条廃寺・石守廃寺・野口廃寺と3ヶ寺が建ち並んでいた。

1983・84年に確認調査（1・2次）[西川2011]、2000年には圃場整備（3次）、2002年には道路新設に伴う発掘調査（4次）[長濱・森永2008]が行われ、金堂跡・塔跡・僧坊跡・東門跡などが検出された。伽藍配置は法隆寺式（西に塔、東に金堂）であるが東面する。僧坊が確認されたのも注目される。寺院は、前代の集落と重なっている。現状は道路と水田。

遺物には**ジグザグ縄叩きの平瓦**や、**輻線文縁**をもつ軒丸瓦などが見られる。創建年代は8世紀前葉頃で、平安時代頃まで存続と推定される。

金堂基壇跡は、南辺約11.8m、西辺約9.5mが残存した。外装は瓦積みで、地覆石を置かず、地面から直接積上げている。基壇の瓦積は補修されたものとされる。

塔基壇跡は一辺約11m、外装は自然石。北辺には階段痕跡と考えられる瓦列が確認された。

■野口廃寺

加古川下流の東岸、印南野台地の西端に位置し、南北をJR山陽線と西国街道にはさまれた野口神社境内をほぼ寺域とする。

すぐ南には賀古駅家（かこのうまや）に比定される古大内（ふるおうち）遺跡が存在する。



野口廃寺 講堂基壇と塔基壇

調査により、塔跡、講堂跡、講堂の西北側に小堂宇跡などが確認され、金堂跡は社殿と重なるようだ。法隆寺式の伽藍配置と推定されている。

寺域は東西一町、南北は未確認。寺院の存続年代は、8世紀前後（白鳳時代終末期）～9世紀。

塔基壇跡は一辺10.2m。**瓦積基壇**。地覆石はなく直接地面から瓦片を積んでいる。

講堂基壇跡は、東西約24m×南北約15mと推定される。**瓦積基壇**、地覆石はない。新旧の各瓦が混在しており、補修を受けている。

小堂宇基壇は、東西約8.2m×南北約6.6mで**瓦積基壇**。地覆石は確認されない。堂宇は経蔵など付属建物と考えられている。

■播磨国分寺跡（姫路市御国野町）

播磨国分寺は市川の東岸に建つ。黒田官兵衛の御着城はご近所である。姫路市教育委員会により調査が継続している。第9次調査（1989～90）により、「中門東部で**回廊の瓦積基壇地覆の一部**と、内外側溝を検出」とあり、回廊が瓦積基壇であったようである[山本2003]。猪名寺廃寺（尼崎市）も回廊が瓦積基壇である。

塔跡は、基壇一辺18.9m（63尺）とさすがに大きく、七重の塔である。心礎も含め17個の礎石の大半が原位置を留める。基壇化粧・階段は検出されなかったが、**瓦積基壇に整備**されている。

*参考引用文献は「むくげの会HP」をご参照下さい

参考・引用文献

- 小川三夫2010『宮大工と歩く奈良の古寺』文藝春秋
p 71
- “奈良・正倉院”『朝日新聞』2013. 11. 30
- 田辺征夫1978「古代寺院の基壇—一切石積基壇と瓦積基壇—」『原始古代社会研究』4 校倉書房
- 田辺征夫1997「瓦積基壇と渡来系氏族」
『季刊考古学 渡来系氏族の古墳と寺院』雄山閣出版
- ハンナレ2013「6~7世紀百濟と日本寺刹建築の比較研究」『シンポジウム 百濟仏教文化が日本列島に及ぼした影響』国立扶餘文化財研究所 *ハングル
- 趙源昌・寺岡洋(訳)2006
「百濟造寺工の対日派遣と建築術の伝播」
『朝鮮古代研究』第7号 朝鮮古代研究会
- 網伸也2005「日本における瓦積基壇の成立と展開—畿内を中心として—」
『日本考古学』日本考古学協会 第20号
- 藤本史子編2013「瓦積基壇一覧表」『伊丹廃寺跡—金堂跡に築かれた瓦窯跡資料を中心として—』
伊丹市立博物館
- 寺岡洋2013「加古川流域(東播磨地域)の「山田寺 亞式」軒丸瓦と額部施文軒平瓦」
『むくげ通信』259 むくげの会
- 加西市教育委員会・甲陽史学会・六甲山麓遺跡調査会
1987『播磨繁昌廃寺—寺跡と古窯跡—』
加西市教育委員会
- 菱田哲郎2010「繁昌廃寺」
『加西市史』第七巻史料編1考古 加西市
- 西口和彦・岡本一士1984『西条廃寺—発掘調査報告書—』加古川市教育委員会
- 上田睦1987「野中寺」『藤井寺市及びその周辺の古代寺院(下)』藤井寺市教育委員会
- 長濱誠司・森永速男2008『石守廃寺』
兵庫県立考古博物館
- 宮本佳典1997『新発見 加古川の考古学』
加古川総合文化センター博物館
- 西川英樹2011『石守廃寺発掘調査概要報告書』
加古川市文化財研究センター
- 西川英樹2004『野口廃寺 発掘調査概要報告書』
加古川市文化財研究センター
- 山本博利2003『播磨国分寺・尼寺跡』記録集
『古代寺院からみた播磨』播磨考古学研究集会